

「残業×過労死×ハラスメントデスマッチ地獄」

—二稿—

2025/3/31

脚本 太郎

〈人物表〉

東堂 歩 (57)
松本 忍 (40)
春野 紡 (20)

倉庫作業員
倉庫管理主任。パワー・ハラスメンター
倉庫作業員

1. 倉庫（昼）

長いラックや高く積み重ねられたダンボールが並んでいる。怒声が飛び交う中、皆せわしなく働いている。春野紡（20）、泣きそうな顔で段ボールを運んでいる。

そんな中ひととき大きな声で、

松本の声「何回言わせんだよ！」

春野、ビクツとなって立ち止まる。

声の方を見る。

積み上げられたダンボールが激しく倒れる。

松本忍（40）怒りの表情で片足を挙げている。彼がダンボールを蹴ったのだ。

すぐ側に東堂歩（57）、神妙なアホ面で直立不動。

東堂「何回でしたかねえ」

東堂、指で数え始める。

松本、身体を小刻みに震わせ、

松本「何でできねえの？」

東堂「何ですかねえ……申し訳ありませんねえ」

松本「おっさんさア……できないで済むのは学生までなんじゃないんすか？」

東堂、考え込む表情。

東堂「どうしろと？」

松本「死でしょ」

東堂「死？」

松本「ちょっとでも申し訳ないと思ってるなら死なない」と

勢いよく胸ポケットからカッターナイフを取り出す。

東堂に差し出し、両目を限界まで開き、

松本「男は黙って切腹っしょ」

春野、ハラハラした様子で二人を見守っている。

東堂、困惑気味に、

東堂「そんなことする義務ないし、」
首を傾げ、

東堂「そもそもそんなことやってる時間あるんですっけ？」

松本 「ねえけどめえのせいだろうが」

東堂、呆れ笑い。

東堂 「それは申し訳ないけど今時間無駄にしてるのはあなただ
なあ、って」

松本、ダンボールを蹴り崩す。

静かな表情で東堂を睨みつけ、

松本 「もう良い……アンタの尊厳、人格、人生、全部否定して
やる」

松本、大きく息を吸う。

男 A 「まずい、松本さんのアレが」

男 B 「皆耳を塞げ！」

何人もの人々が耳を塞ぐ。

松本、東堂を指さし、凄まじく大きな怒声で、

松本 「自殺しろ！」

声が倉庫内を震わせ、ダンボールの山を崩し、
走行中の二台のフォークリフトが制御を失う。

2. フォークリフト・運転席（昼）

ガタガタ揺れる運転席。

リフトマン、頭を抱え、泣き喚き、苦しんでいる。

フォークリフトは荷物を落としながら壁に向かう。

3. 倉庫（昼）

二台のフォークリフトが壁に激突する。

リフトマン二人以外の全員、その場に伏せている。

男 A 「また職場で人が死ぬのを見るのか……」

伏せている春野、恐る恐る顔を上げる。

手元にスマホが落ちている。画面には顔を殴られた

痕跡のある若い女性の画像が映っている。

慌ててスマホを回収する。

東堂、気の抜けた顔で堂々と立っている。

松本、愕然と、

松本 「効かない？」

東堂 「自殺って『時差通勤』の略でしたっけ？」

一同、愕然とする。

春野 「冷静沈着なバカだ」

東堂 「自分、明日何時に来ればいいのかなあ、って」

松本、大きく息を吐く。

気を取り直すように指を一本立て、

松本 「自殺ってのは……自分で死ぬってことだよ」

東堂 「何故？」

松本、激高し、

松本 「お前が、我々人類の足を引っ張って、未来を奪おうとしているからだ！」

東堂、呆れ笑い。

東堂 「いや、自分が訊いてるのは」

呆れ笑い。

東堂 「何で『自分で死ぬ』って普通に言え方がいいところを」

呆れ笑い。

東堂 「わざわざ『自殺』なんていう一般的じゃない難しい言い回しをしたのかなあ、って」

呆れ笑い。

春野 「全然難しくない……」

男 A 「何で『時差通勤』が分かって『自殺』が分からないんだ」

東堂 「自分、疑問ですかねえ。格好良いからですかねえ？」

呆れ笑い。

松本、怒りのあまり震えながら失禁。

ズボンに尿のシミが広がる。

東堂 「あと自分が死ななきゃいけない理由もやっぱり分からないですかねえ」

東堂、腕を組み、神妙なアホ面で何度も頷く。

松本 「上げ足取ってんじゃねえぞ生存無資格者が！」

足元のダンボールを蹴り上げる。

松本 「シンギュラリティングな超高性能バキバキAIが九千憶年考えたってめえの死が客観的な善であるっつー以外の結論出ねえよ」

蹴り上げられたダンボールを殴り落とす。

松本 「それが人類全体の利益でそれを願うのが人類の総意なん

だよ」

落ちたダンボールを踏み潰す。

松本

「てめえが人類に貢献するにはなるべく早く、できる限り苦しんで死ぬ以外にねえんだよおおっ！」

松本、肩で息をする。

東堂、神妙な顔で考え込み、

東堂

「それ、全部あなたの主観でしかないのに、何で人類の総意ってことになるのかなあ、って」

松本、髪を掻きむしり、

松本

「俺があ！」

大量に引っこ抜き、

松本

「コン職場でえ！」

髪をばらまく。

松本

「一番偉いからだよおっ！」

東堂

「あなたがここで一番偉いからって、」

東堂、辺りを見回し、

東堂

「別にここにいる人たちの意見を勝手に総括できるわけじゃないなあ、って。一人一人独立した人間なんですから」

松本、激しく身体を痙攣させ、

松本

「うるせえっ、俺は神だああ！」

東堂、無表情。

からの呆れ笑い。

松本、悔しそうに顔を顰め、

子どものように泣き出し、

松本

「神様だもーん」

東堂、鼻で呆れ失笑。

理解しがたいというように首をかしげる。

松本、白目を剥き、

崩れ落ちる。

春野、茫然と呟く。

春野

「凄い」

松本を見下ろし、

春野

「あの化け物を……」

男A、茫然と東堂を見つめ、

その目が羨望に染まる。

男 A 「神だ」

倉庫内に歓声が起きる。

春野は一人、何かを考えこんでいる。

東堂、困惑顔。

松本の声「静まれ糞尿共！ てめえらも自殺させるぞ！」

倉庫内、静まり返る。

松本 「まだ俺は負けてない。負けるわけにはいかないんだ」

松本、涙を拭い、

足を震わせながら立ち上がる。

松本 「俺は、アンタみたいな社会を舐めた人間が許せなくてパ

ワー・ハラスメンターになったんだから」

松本、東堂に指を指す。

松本 「アンタ今日残業しろ」

東堂、自分の鼻を指さす。

松本 「この怒りは到底定時じゃ収まらん。業後に、アンタ一人、集中して指導してやるよ」

どよめきが起こる。

東堂 「ハラスメント・デスペナルティだ。言葉の暴力の恐ろしさ

さを心の芯にまで思い知らせてやる」

東堂 「分からないけど、残業代出るならやる所存ですかねえ」

松本 「アンタがあ！」

東堂、不思議そうに自分を指さし、

東堂 「自分が？」

松本 「アンタという名の社会の排泄物が」

東堂 「自分、名前『アンタ』じゃないなあ、って」

松本 「生きているという理不尽と、俺はあ、全力でえ、戦っていくう！」

松本、激しいファイティングポーズを決める。

4. 倉庫（朝）

松本、首を吊っている。絶望しきった死に顔。

作業員たち、呆然と松本の死体を見上げている。

東堂、ラックの前で、唯一平然と作業をしている。
春野、東堂を見て、何かを決意した表情。

5. 倉庫・休憩スペース（昼）

長机と椅子が並んだ空間。脇には自販機が幾つか。
職員たちが食事をしている。

東堂の付近には人が寄り付かず、皆彼を恐れと羨望
が混じった様子で伺っている。

ヒソヒソ噂話の声。

東堂は気にせず黙々とコンビニ弁当を食べている。

春野、入室。

東堂の向かいの席にやってくる。

ざわめき。

春野 「ここ、座っても？」

東堂、目だけ春野に向けて、

東堂 「別に自分に許可取る必要ないなあ、って」

春野、僅かに顔を顰め、

春野 「ああ、そうですか」

席に座り、コンビニの袋を置く。

気を取り直すように卑屈に笑い、

春野 「ぼく、春野って言います。趣味はDV」

東堂、眉を顰め、

東堂 「あつてはならない言葉の羅列だなあ、って」

春野、楽しそうな様子で早口に、

春野 「実は性欲に負けて腐れ縁のちよつと頭おかしい女の子と
付き合ってたんですけど、人間性が気に食わなくて毎日殴
ってるんですよ。でもこれがまた面白くって」

一人でゲラゲラ笑う。

東堂、首をかしげながら残念そうに、

東堂 「被害者だから皆善良とは限らないってことかなあ、って」

春野 「東堂さんは何か趣味ってあるんですか？」

東堂 「自分、回りくどいのって好きじゃないなあ、って」

春野 「はあ」

東堂 「自分に何の用なんですかねえ？」

春野、神妙な顔に。

前屈みになり、

春野 「東堂さん……革命を起こしませんか？」

東堂 「は？」

呆れ笑い。

春野、目を見開いて東堂の顔を指さし、

春野 「それですよそれ、その呆れ笑い」

東堂、首をかしげてさらに呆れ笑い。

春野 「それ、端的に言って糞ウザいんですよ」

東堂 「そうですか」

春野 「普通人であるぼくですらこんなに苛つくんだから、ハラ

スメンターなんて沸騰して蒸発しますよ。まさに兵器」

東堂 「あなた普通なんですか？」

春野 「あなたはまさに奇跡の弱者です。弱者でありながらその

極端な愚鈍さによってハラスメントをすべて無効化し、

カウンセラーで呆れ殺す」

東堂 「初めて聞く動詞だなあ、って」

春野、どんどんテンションが上がっていく。

春野 「昨日のハラスメント・バトルはまさに聖戦でしたね。感

銘を受けました。一生忘れませんよ。ぜひ残業戦まで見

届けたかった」

東堂 「自分、普通に仕事してたら、勝手にあの人が首吊っただ

けな認識ですなあ」

春野 「そんなわけがない。普通なわけない。あなたは被ハラ

メンターの王になる器だ」

清掃員が入室。モップとバケツを持っている。

春野 「アンチ・ハラスメンター・キング……ハラスメンター殲

滅作戦の旗印としての王にね」

東堂 「何を言ってるのかなあ、って」

春野 「簡単ですよ。昨日の戦いを世界規模で再現し、ワールド

・ハラスメント・ウォーズを勃発させ、さらにハラスメ

ンター・ジェノサイドにまで持っていく」

清掃員、掃除の準備中。

春野 「あなたの力があれば可能だ。地上からハラスメンター共

を根絶できる。ハラスメント・デスペナルティなんて二度と起こさない」

清掃員、床を、モップで嘖き始める。

春野 「皆松本さんが死んでラッキーくらいにしか思っていないでしょうが、それだけで終わらせるなんて勿体ない。奴らはまだ跋扈している」

清掃員が床を嘖きながら春野たちに近付いてくる。

春野 「あ、そうだ。あなたの二つ名を考えたんですよ」

東堂 「はあ」

春野、ドヤ顔で、

春野 「『合理的な愚者』と書いて、『インテリジェント・パラドクサー』……どうですか？」

清掃員が春野たちのすぐ近くに達する。

東堂、鼻から呆れ失笑。

春野、激高。

清掃員のモップを奪い、

テーブルに飛び乗ると同時、東堂に振り下ろす。

東堂、椅子を限界まで後ろに倒し、危ういバランスを保ったままモップをかわす。床スレスレ。

春野、絶句。

東堂、椅子の足を蹴って躍り上がり、

春野を飛び越えてその後ろへ。頭が下。手にモップ。

東堂 「秘剣、『万象演武』——」

空中でモップを、凄まじい速度で繰り出す。

東堂 「——『修羅椿』」

モップが春野の肩を貫通。悲鳴。

飛び散る血。

それに散りゆく椿の花びらの幻影が重なる。

東堂の声 「自分確かに愚者だけど、だからって何で弱者だと決めつけるのかなあ、って……思いますかねえ」

終